



【フロウ】 Flow



福島県奥会津の暮らしに息づく伝統文化は、只見川・伊南川とその支流に集約される豊かな水の流れの中で育まれてきました。Flowは、奥会津の宝である「豊かな自然・伝統文化・ここで生きる人」を、皆さんと見つけていく情報紙です。

奥会津を つなぐ人々

南会津町南郷地区で地元の木や廃材を使い、皿やカップなどの製作を楽しむ「南山郷人の会」。"木育"を通して地域の子どもたちに木の良さ、ものづくりの楽しさを伝える活動も行っている。一度は途絶えた南郷の木地師の伝統と技術はいま新しい形で甦り、受け継がれようとしている。



Okuetsu news Flow

自ら楽しみ未来に伝える 木地師の伝統と技術

住民に楽しさを広めるため
各集落で木工体験を開催

国道289号を南会津町南郷から田島方面へ向かうと、駒止トンネルの手前左側に「南山郷木地師戸板集落墓跡」がある。「宝暦6年(1756)」にこの地にやってきた木地師たちの集落跡とお墓が残っています。彼らは40年間ここで山の木を切り、お椀などの会津塗りの木地を作って暮らしていました。そう教えてくれたのは、南会津町役場南郷総合支所の集落支援員として活動する伊藤康弘さんだ。

伊藤さんは定年退職後に現職に就き、南山郷木地師の存在を知った。南郷にも昭和50年代頃まで木地師を生業とする人たちがいたが、現在その伝統と技術は途絶えている。「私自身20年前から趣味で木工をしていたので、もう一度南郷に木地師の文化を復活させたいと思ったんです。伊藤さんは持ち運びができる電動ろくろを自費で購入。車に積んで集落を回り、木工の楽しさを地域住民に広めることにした。

その時に出会ったのが五十嵐政次さんだ。「実は私のおじさんが木地師で、工場でお椀や茶櫃を作っているのを子どもの頃に見た記憶があります。元々興味があったのですが、『やりたい!』と思って伊藤さんに相談したら、『じゃあ仲間を集めてやるうか』となりました。各集落の集会所などで木工体験をしてみたい、有志を募って2018年2月に「南山郷人の会」を立ち上げた。現在は宗像美由紀さんら女性2人を含む8人の会員で精力的に活動している。



<https://www.okuetsu100.jp/flow/>



「木育」を通して継承する 南郷の木地師の伝統と技術

「私が子どもの頃には当たり前のようにあった、南郷の木地師の伝統と技術を後世に伝えたい。同時に木の良さ、ものづくりの楽しさを伝えたいという思いで南山郷人の会を立ち上げました」。そう語る五十嵐さんが会長となり、伊藤さんは会員兼師匠として会員たちの指導にあたっている。県と町の補助を受けて電動ろくろ3台などを購入。国道289号沿いの南郷直売所駐車場に作業場を構え、会員たちが木工の腕を磨いている。



電動ろくろ(木工旋盤)に木地をセットして回転させ、ノミを当てて削っていく。深いものや大きなものは難しく、熟練の技が必要となる



伊藤さん、五十嵐さん、宗像さんが作った作品。事前予約をすれば個人やグループでの木工体験も可能。出前講座も受け付けている。予約・問い合わせは五十嵐さん(下記参照)まで

南山郷人の会
南会津町山口字椿平222番地
TEL:080-6002-8346(五十嵐さん)

材料の木は、南会津産のスギ、ケヤキ、ヒバ、ナラなど実に多彩だ。地元の木を使って自分好みのお皿やカップを作り、それで食事をするのって贅沢ですよ。その豊かさに惹かれて木工を始めました」と、宗像さんは笑顔を見せる。また、建築廃材をもらってきて使うことも多いのだそう。「例えば床を張った時に出る端材も削りよんで立派な皿になるんです。こうして使えば廃材にも利用価値が生まれると多くの人に知ってもらいたいです

ね(五十嵐さん) 南山郷人の会では、地元の小学生や高齢者、婦人会の女性らを対象にした木工体験教室も開催している。現在は新型コロナウイルスの影響で難しいものの、ひめさゆりまつりなどのイベントにも出店してボールペン、皿、カップ作り体験や絵付け体験などを実施してきた。五十嵐さんも宗像さんも腕前は「まだまだ」と笑うが、体験の講師を務めるまでに上達している。

南山郷人の会が特に力を入れている活動は、子どもたちへの「木育」だ。「後継者作りをどうするかみんなで考えて、子どもたちに木と触れ合ってもらって楽しんでもらうことにしました」と(伊藤さん)。地元・南郷小学校の課外活動で、木の板を組み立ててペンケースやペン立てを作り、絵付けをしてもらうと大好評だった。さらに今年度は6年生が電動ろくろで皿を作り、絵付けをする卒業記念制作を行ったという。「子どもたちが大人になった時に木工体験を思い出してくれば、我々の活動が少し前進するんじゃないか。やがて彼らが木地師の伝統と技術を継承する形になれば」と思って、いまだ道に活動しています」と伊藤さんは期待を寄せる。

まずは自分たちが木工を楽しみ、体験を通して子どもをはじめとする地域住民にその楽しさを伝える。南郷の木地師文化はいま新しい形で甦り、未来へ受け継がれようとしている。



伊藤康弘さん(左)・五十嵐政次さん(右)

伊藤さんは南会津町田島生まれ。「自分で作ったお猪口やワイングラスでお酒を飲みたい」と20年前から独学で木工を始める。五十嵐さんは南会津町木伏生まれ。4年前に伊藤さんと出会い木地師の道へ。南山郷人の会会長を務める傍ら自身の腕を磨いている



ただでん 掲示板 vol.4

只見川電源流域振興協議会からのお知らせ

奥会津の美味しいもの、すごいものが大集合!!



「奥会津 んめえ! すんげえ! まるっと市 in 福島」

日時:3月4日(金)~3月5日(土)
場所:コラッセふくしま 1階
福島県観光物産館

※2月5日~6日のいわき・LATOV会場は、新型コロナウイルス感染症の拡大に伴い中止となりましたのでお知らせいたします。

奥会津の「んめえがな(美味しい食品)」、「すんげえがな(すごい手工芸品)」を「まるっと(全部)」紹介する「奥会津んめえ! すんげえ! まるっと市」を1月22日~23日、いわき・ら・ミュウ会場にて開催しました。ご来場いただいた皆様、ありがとうございました。

まるっと市には、米焼酎ねっか、会津地鶏の加工品、ゆべしなど、奥会津の逸品が勢ぞろいとなります! 今後の開催予定は上記のとおりです。

ぜひこの機会に、奥会津の「んめえがな」「すんげえがな」に触れてみませんか。皆様のお越しをお待ちしています。

※今後の新型コロナウイルス感染症の感染拡大の影響によりイベントが中止となる場合があります。

読者の声

●第2号の小山さんのおせしかプロジェクト、今後の広がりが楽しみです。益子で鹿皮と言え、陶芸の道具です。ろくろなどの成形の最後に、濡らしたなめし皮で撫でて口縁をなめらかにします。鹿皮のやわらかさと伸縮性がちょうど良いのでしょう。令和の奥会津風土記、遠く離れた昭和村と益子町に同じような信仰があったことが興味深いです。(栃木県益子町・TSさん)

●観光雑誌やおしゃれなチラシでは知ることのできない、会津で生活する人々の暮らしぶりや文化、歴史をわかりやすく掲載するFlowを毎回食い入るように楽しく読ませてもらっています。特に、第2号の奥会津をつなぐ人々の紹介では、駆除された鹿の皮を新たな形で世に送り出す職人の記事ですが、県内でそのような活動に取り組まれている方がいることを初めて知り、興味深かったです。また、奥会津風土記を見て昭和村に行ってみたくまりました。(福島県国見町・SKさん)

編集・問合せ先

新・奥会津だより「Flow」編集部(株式会社日進堂印刷所内)
〒960-2194 福島市庄野字柿場1-1
TEL:090-6852-0953(専用電話) FAX:024-594-2041
Eメール:flow@nisshindo.co.jp

ご意見・ご感想をお寄せください。

奥会津だよりの定期購読を希望される方は、編集部まで、発送先(ご住所・お名前)をお知らせください。個人情報の取扱いにつきましては適切に管理を行っています。詳しくは、日進堂印刷所のホームページをご覧ください。



自然の中に
暮らすいとなみ、
100年先のみらいへ。



最新情報は
ホームページで
ご確認ください。

只見川電源流域振興協議会 事務局

〒968-0006 福島県大沼郡金山町大字中川字上居平933番地
東北電力奥会津水力館「みおり」奥会津振興センター内
TEL:0241-42-7125 FAX:0241-42-7127
Eメール:tdrsk@okuizu.net

只見川電源流域振興協議会の主催・共催事業については、最新情報をホームページで随時公開しています。

この冊子は電源立地地域対策交付金の事業より作成されています。

令和の 奥会津風土記

～むらをあらく～

金山町・三島町編

会津学研究会 菅家 博昭

菅家博昭プロフィール

1959年生まれ、昭和村在住、花農家。会津学研究会代表、昭和村文化財保護審議会委員長を務めるなど、会津地域を中心に調査を続けている。著作に『芋(からむし)～地域資源を活かす生活工芸双書』『暮らしと繊維植物』など。

新型コロナウイルス感染症の拡大から2年目となる2021年9月末、国内の緊急事態宣言がようやく解除された。東京都内に居住する民俗学者・赤坂憲雄氏(学習院大学教授)も移動ができるようになり、私たちの村歩きに随行された。

11月4日・紅葉の晴天の日、大沼郡金山町の中川・沼沢地区に関わる史跡を訪ねた。

集合場所は道の駅「奥会津かねやま」。ここには江戸時代中期の沼沢地区の五十島家を移築した福島県指定重要文化財の建築物があり、町内出土の先史時代の遺物が展示されている。また江戸時代のウルシの実から口ウ(蠟)を搾る道具もある。当地はウルシを栽培し、樹液ではなく、実から口ウを採ることが長い間、生業であった。これらをまず見学した。道の駅に隣接して2020年に開館した東北電力奥会津水力館「みお里」がある。



道の駅「奥会津かねやま」に集合して、行程の説明

縄文・弥生の遺跡と、史跡を巡る

① 中川地区(標高292m～295m)の集落がある段丘を歩いた。鹿島神社の北側には竹が群生している。竹は他所から持ち込まれ植えられたものと思われるが、植物学的な来歴の調査が必要である。笹類は多くあるが竹は少ない地域が奥会津である。赤坂氏もその点について、竹は何に利用したのか歩きながら議論をした。



鹿島神社

鹿島神社に隣接して墓地があり、大悲堂(宮崎聖観音坐像)がある



古い墓石の文字を読む



大悲堂

② さらに北をめざせば弥生時代の再葬墓が確認された「宮崎遺跡」がある。ここから出土した破砕した管玉等は道の駅「奥会津かねやま」に展示しているが、石川県小松市で製作されたものであることが最近わかっている(『福島県立博物館紀要第30号』)。



宮崎遺跡出土の管玉(金山町教育委員会所蔵)

ここ中川には金山史談会を結成し会長であった故渡邊良三先生が暮らし、江戸時代の柳津虚空蔵堂の再建に関わったとする中川(宮崎)大工についての歴史の調査もされている(『金山史談14号』)。宮崎大工の棟梁・田辺奎之進については神奈川大学日本常民文化研究所編『奥会津地方の職人巻物』で宮内貴久氏が詳述している。

石神平遺跡

③ 次に、沼沢火山火口原の標高430mの台地上に移動した。栗団地を経営していた地域に隣接して「石神平遺跡」がある。現在は杉林となり現地には入れないが1982年から2ヶ年発掘調査が行われた(出土品は道の駅展示)。縄文時代中期の複式炉住居跡が確認されている。



石碑



栗団地跡(上田発電所建設で水没した田畑の代替地に、昭和35年、宮崎の人々は栗の栽培を始め栗の木はまだ残存している)を望む

沼御前神社

④ 大栗山集落から福沢集落、沼沢カルデラ湖岸を進み沼沢集落の「沼御前神社」を参拝した。ここは文政4年(1821)の「大石組地震」の際に、地震沈静化を祈願した神社であり、渡邊良三先生が詳述している(『金山谷文政の水難』)。



沼御前神社



沼に続く石段(沼御前神社の参道)

縄文中期の埋木(三島町)

⑤ 沼沢から三島町早戸を經由し、宮下・桑原の「荒屋敷遺跡」(縄文晩期)、大谷川を朔上して大谷地区に着いた。大谷川から縄文時代前期末の埋木が確認されている。2021年7月7日の調査で来町した山元孝広先生は、『沼沢火山の調査研究』(深部地質環境研究センター)の中で、沼沢火山について約11万年前から火山活動(尻吹峠)、7万年前(木冷沢溶岩)、4.5万年前(水沼火砕堆積物)、4万年前(惣山)、2万年前(沼御前・前山)、紀元前3400年という噴火の経過を示している。この約5400年前に最後の噴火をした沼沢火山により埋没したものだとしている。

これら埋木調査は三島町早戸の佐久間建設により実施され、調査に立ち会われた武藤弘毅氏に現地説明をお願いした。



沼沢噴火との関係学ぶ

⑥ その後、掘り上げた埋木を展示している名入の「もりの仕事舎」を訪問し、武藤さんの説明を聞いた。三島町の交流センター山びこ、生活工芸館が近くにある。



発掘された5400年前の埋木

写真:菅 敬浩・菅家 博昭



奥会津の 美術館 資料館

Okuaznu news Flow

QUIZ

からむし
工芸博物館から
のクイズです！

昭和村では草丈が短い規格外のからむしを子どもに引かせ、技術を習得させてきました。このからむしを「ワタクシ」といいますが、いったいなぜ「ワタクシ」と呼ぶのでしょうか？

答えを知りたい方は
からむし工芸博物館へ

Go!



昭和村役場からむし振興室主査・根本崇範さん



DATA

からむし工芸博物館

詳しくはこちらから



昭和村大字佐倉字上ノ原1
(道の駅からむし織の里
しょうわ構内)
TEL:0241-58-1677
開館時間:9:00-17:00
(入館は16:30まで)
休館日:年末年始、臨時休館あり
入館料:高校生以上300円、
小・中学生150円

からむし工芸博物館 “からむし”を守ってきた昭和村の人々の技と想いに触れる



からむしと深く関わる縄文土器の展示コーナーもある

古より現代まで続く、からむしと昭和村の歴史

『からむし工芸博物館』展示室。最初のコーナーには昭和村の遺跡から出土した縄文土器が並んでいる。「からむしは日本に昔からある植物の一つ。縄文土器の縄目模様には、野生のからむしや麻などの植物繊維の縄が使われたのではないかと考えられています」。昭和村役場からむし振興室主査の根本崇範さんの解説を聞き、この村とからむしの関わりはそんなに古くまで遡れるのかと驚く。

からむしは別名「苧麻」とも呼ばれるイラクサ科カラムシ属の多年草だ。伝承によると村にからむし栽培が伝わったのは600年ほど前とされ、江戸時代の宝暦年間(1751~1764年)の資料に栽培の記録が残っているという。茎の表皮から取り出した上質な繊維は新潟県に出荷されて国指定重要無形文化財の高級織物・越後上布や小千谷縮布の原料になるほか、村で手織りされてからむし織となる。「江戸時代から一度も途絶えずに栽培が続いてきたのは、本州では昭和村だけです。『からむしは無くしてはいけない』と村の人が大切に守ってきた成果だと思います」(根本さん)

植物から糸、布が出来上がる工程がよくわかる多彩な展示

畑でからむしを育て、繊維を取り出し(苧引き)、糸をつくり(苧績み)、紡ぎ、昔ながらの地機や高機で織り上げる。5月の“からむし焼き”から始まり、深い雪に閉ざされる冬の機織りまで続く昭和村の手仕事。高い技術で越後上布と小千谷縮布を支える「からむし生産」と「苧引き」は国の選定保存技術に、「奥会津昭和からむし織」は国の伝統的工芸品に指定されている。同館には畑仕事の道具、苧引きに使う苧引き板、績んだ糸をためる苧桶、糸車などの生産用具や製品が多数展示されており、植物から糸、そして布が出来上がる工程を深く学べる。

展示室中央には天井から真っ直ぐに伸びる美しいからむし織が飾られ、その周りを村人たちの写真が囲む。「2001年の開館当時に昭和村からむし生産技術保存協会の会員だった方の写真です。みんなでからむしを支えているという意味合いが込められています」と根本さん。昔も今も変わらない丁寧な手仕事には、昭和村の人々のからむしへの想いが詰まっている。



昔ながらの地機のほか、多彩な道具や織物が展示されている



三島町交流センター山びこ

詳しくはこちらから



イベントホール・ギャラリー・和室がある多目的交流施設。ギャラリーでは企画展を開催し、エントランスでは通年で写真などの様々な展示を実施している。
三島町大字名入字諏訪ノ上418
TEL:0241-52-2165
開館時間:9:00-17:00
(最終入館16:30)
休館日:月曜日
(祝日の場合は翌日)
入館料:無料
ギャラリーのみ企画内容によって有料の場合有



会津田島祇園会館

詳しくはこちらから



国重要無形民俗文化財に指定されている「会津田島祇園祭」を紹介する展示館。子供歌舞伎の大屋台や七行器(ななほかい)行列の展示からは祭りの賑わいが伝わってくる。
南会津町田島字大坪30-1
TEL:0241-62-5557
開館時間:9:00-16:30
休館日:12月~3月の火曜日、
年末年始
入館料:大人500円、
小人300円



やないづ縄文館

詳しくはこちらから



縄文中期~後期の土器を中心に、柳津石生(いしゅうまへ)地区で発掘された土器を数多く展示。竪穴式住居が復元され、縄文人の暮らしが体感できる。
柳津町柳津字下平乙151-1
TEL:0241-41-1077
開館時間:9:00-16:00
休館日:第2・4木曜日
入館料:無料



ただみ・ブナと川のミュージアム

詳しくはこちらから



ユネスコエコパーク登録地・只見町にある自然史博物館。豪雪とブナ林に象徴される自然環境と、それらを利用してきた人々の暮らしぶりを、パネルや現物資料で紹介している。
只見町大字只見字町下2590
TEL:0241-72-8355
開館時間:9:00-17:00
休館日:火曜日
(祝日の場合は翌日)、年末年始
入館料:高校生以上310円、
小中学生210円



やないづ町立斎藤清美術館

詳しくはこちらから



時代とともに変化する作風で多くの人を魅了する版画家・斎藤清。代表作「会津の冬」シリーズをはじめ、約1,000点の収蔵作品を、企画展を通じ紹介。ワークショップも多く開催している。
柳津町大字柳津字下平乙187
TEL:0241-42-3630
開館時間:9:00-16:30
休館日:月曜日、年末年始、
臨時休館あり
入館料:大人510円、
高校・大学生300円、
小中学生無料

アイコンの見方



美術館



博物館



資料館



記念館



展示館、展示場



歴史的建築物や史跡等



冬季休業